齋木仙醉著

三教會同の未來

269
454
特
54

013587-000-4

特30-544

三教会同の未来

斎木　仙酔／著

M45

ABA-0055

特30
544

宗教局

謹みて本書を三教合同の實行者内務大臣及び内務次官及び宗務局長に獻ぐ

明治
45. 7. 12
内交

三教會同の未來

齋木仙醉 著

會同の批評

床次内務次官の提議にかゝる三教會同の事は種々の非難障碍ありしにも拘らず、首尾能く成立して、遂に三教會同者等の手に成れる左の一篇の決議文を見るに至りぬ、眞に慶賀すべき事どもなり。

決議文

吾儕は今回三教會同を催したる政府當局者の意思は、宗教本來の權威を尊重し、國民道德の振興、社會風教の改善の爲めに、政治、教育、宗教の三者各々其分界を守り、同時に互に相協力し、以て皇運を扶翼し時

勢の進運を資けんとするに在ることを認む、是れ吾儕宗教家年來の主張と相合致するものなるが故に、吾儕は其意を諒とし、將來益々各自信仰の本義に立ち奮勵努力國民教化の大任を完ふせむことを期し同時に政府當局者も亦誠心誠意、此精神の貫徹に、努められんことを望み、左の決議をなす。

（一）吾等は各々其教義を發揮し皇運を扶翼し益々國民道德の振興を圖らんことを期す。

（二）吾等は當局者が宗教を尊重し政治、宗教及び教育の間を融和し國運の伸張に資せられんことを望む。

予熟々思へらく、かの三教會同を非難し若くは之を冷淡視する人はよしや一應の理由はありとするも、遂に大局に暗きの譏を免るゝことの能はずと。殊に大谷派が此擧に贊成せざりしは吾人の甚だ遺憾とする所なり。

人は曰ふ、三教會同のこと單に床次々官の氣まぐれの計畫に過ぎずと。予は爾か信ぜず。次官の此計畫は固より次官の主義、性格より發露したるものなるべく又之を社會的方面より觀察するも其由つて來る所や遠く、斷じて之を輕々視すべきものにあらざるなり。予は此に關する國民の態度が尙一段の熱誠を缺けりと云ふに躊躇せざるなり。此美擧や實にかの幸德一派の兇徒等の明治史を汚したるに比敵して該史上に光明を放つものなり。吾人國民たる者焉ぞ能く此擧の性質、意義、理想等を研究して將來に資し、以て前代未聞なる聖代の光榮ある一事業を成就せしめずして可ならむや。予の本著ある又實に此が爲なり。

正直に云へば予は三教會同を以て未だ完備せるものなりとなさゞるなり。所謂三教とは佛教と基督教と神道との謂なるが、當局者は何が故に佛、基、神、の三教のみを數へて儒教を脱漏したりや。儒教の脱漏は故意か、不注意か、無論前者なるべし。如何にしても當局者が堂々たる儒教の如き大系統を看過し得べしとは信ずべからざればなり。思ふに當局者は儒教は德教なるが故に、寧ろ之を禮拜、儀式などを主とする他の宗教と同日に論せざるを可とすと思惟し、敢て儒教を脱漏したるなるべし。然れどもこは不幸にして當局者の思違なり。請ふ予をして其何故に然るやを說かしめよ。

抑も儒教は天といふ觀念を一切思想の淵源とするものなり。天とは一大の義にして、神といひ佛といふと類に於て何等相違あるものにあ

らず。誰か佛、基、神三教の本尊は宗教的なれども天は然らずといふものぞ。若し宗教の意義を極めて狹義に解釋し又學理的に解釋せば、眞の宗教と稱へらるべきもの、眞の宗教的禮拜の對象たるに足るものは二つ以上あるべき理なし。或は一は宗教といはんよりも、寧ろ哲學といふべく、或は倫理といふべく、或は科學といふべきを正當とするやも知るべからざるなり。然れども斯くの如き判斷は專門家中の專門家のみ獨り之を能くすることを得、門外漢の俄に斷ずべきことにあらず。當局者たる者は宜敢宗教の語を廣義に解釋して事を行ふべきのみ。明治の儒教が特に其宗教的色彩に於て缺如たるは予と雖も之を認む。然れども儒教なるものは昨日今日の儒教にあらず、決して目前の情勢のみを見て之を判斷すべきものにあらざるなり。然り斯くの如きは斷じて天下百

年の大計を立つる者の採るべき方策にあらず。敢て問ふ、西洋諸國の比較宗教學者にして儒教を一箇の宗教と目せざる者何處にありや。又日本從來の習慣は如何に聖德太子の神、儒、佛三教の融和を計りたるが如き、空海の三教を評論せるが如き、孰れも皆儒教を以て一方の主義を代表する大思想として之を取扱ひしにあらずや。今當局者が儒教一流の宗教思想が何を貢献するやに考へ及ばずして之を度外視し去りたるは予の實に遺憾とする所なり。又東京には孔子教會なるものありと聞く。而して此教會員が當局者の度外視的態度を傍觀して何等抗議を申込たるを聞ざるは何ぞや。噫今の世一の孟子なきか韓退之なきか。予は尚ほ孔子教會に就きて一言せんと欲す。そは孔子教といふ命名に就きてなり如何にも孔子は儒教の大立物儒教の經典の如き皆彼の門より

出たりとせば、之を推尊するは固り其處なり然れども既に儒教といふ美名あるに拘らず之に替ふるに孔子教の名を以てするは大に其當を失せり。支那には孔子以前既に堯、舜、禹、湯、文、武、周公の如き許多の聖人輩出し、永く其國人の典型として仰がる。孔子も亦此等の聖人を推尊し、敢て謙して述べて而して作らずといふ。固り孔子の盛德は遠く其先輩たる諸聖人を凌ぐものあるべしと雖もそは人格に於てなり、教理に於てにあらず。特に宗教的思想に關しては孔子當時よりも孔子以前の方遙に隆盛なりしをや。嗚呼何ぞ儒教の名を改めて孔子教とせんや此改名の如きは畢竟耶蘇教にかぶれたる所作のみ。總じて教祖中心の思想は既成宗教の進歩發達を妨ぐること夥し此障碍物を除くことは宗教革進の第一歩なり。由來儒教の如きは幸に此迷信を遠ざかりしものなる

に、時代の風潮に漂はされて輕卒にも孔子教の名を作りて復た此弊に陷らんとす。何ぞ浩嘆に耐ゆべけんや。若し孔子の名譽の爲に會堂を捧げんとならば宜しく孔子會堂といふべし、孔子教といふが如きは斷じて不可なり。

以上予は儒教を會同中に加へざりしはことの不備なる所以を說きぬ。若し幸にして賢明なる原內相や床次々官が吾人の意見を容れらるゝとせば、三教會同の名は自然四教會同の名と變らざるべからず。然れども予は此四教會同の名と實とを以てして未だ俄に滿足すること能はざるものなり。何が故ぞ。曰く。佛、基、儒、神以外明治の照代は幾多の新宗教を喚起したり。此等新宗教の聲は未だ微なりと雖も、之れ決して侮るべき聲にあらざるなり。何となれば此等新宗教の主張は概ね

（一）教權を歷史上の一人物に置くことを拒み

（二）既成宗教の融和を計り

（三）學理に戻らざる教理を有せんと努むる

など、實に二十世紀的の淸新にして且つ健全なる思想を表明すればなり。斯かる新宗教者等の聲は眞に現世界に於ける人道の聲なり、ヒューマニティーの叫なり。彼等の多くが地位と名譽と財產と勢力との乏しきを以てして、孤軍奮鬪其主張を貫きて已まざらんとするは眞に敬服の至りなり當局者たる者は此人々の聲に耳傾けざるべからざるなり予は豫言せむ「末つひに海となるべき山川もしばし木の葉の下くゞるなり」とは、眞に新宗教の未來を歌へるものなるを。

新宗教の主張者等の顯著なるものを會同中に加ふるは、宗教を益々

改善し國民の精神を向上せしめんと欲する當局者の須く取るべき政策なり。今試に其利益の顯著なるものを擧ぐれば

一、動もすれば保守的にのみ傾かんとする恐ある宗教界に進歩的氣運を催進すること

二、既成宗教間に存する歴史的惡感情を緩和するに功あること

三、所謂新宗教は概ね日本にて發生したるものなれば大低皆特に國粹發揮に傾けること

四、新宗教は概ね今日の世界の大勢につれて、融和的の思想に富めるが故に、能く在來の各宗教の契合點を指摘し、比較的公平なる批評者たるの地位に立つに適す。若し諸宗教の合同なるものが他日實現するの期ありとせば、新宗教者等の之に關する貢献は蓋し計るべからざ

るものあるべきこと。

等なり。當局者或は言はむ。既成宗教の代表者を選むことは易し、雨後の筍の如く發生する新宗教主唱者等の中より其代表者を選出するは難しと。此言一理あるに似たりされど此困難は必しも打勝つべからざる種類のものにあらず。例へば太陽等民間の大雜誌をして投票の方法によりて輿論の聲を喚起せしめ當局者は其結果を參考として人選を行へば可なり。斯くの如きは直接目的の成功以外必ずや國民をして、價値ある宗教、合理の宗教に同情を寄する良習慣を作らしむるの媒たらん新宗教家中人物決して少からず。例へば道會の松村介石氏の如き、名古屋道會の某氏の如き神生教壇の宮崎虎之助氏の如き、新佛教の境野黄洋氏の如き其一人として目するも不可なかるべく尚此外にも多くあ

るべし。

理想的宗教會同よ、理想的宗教會同よ、今は予の夢想に過ぎざる理想的宗教會同よ、汝は早晩遂に來らざるべからず。汝若し來らば日本の宗教界は如何になるべき蓋し最良なる思想に歸せん。最良なる思想とは何ぞ。予は之に就きて予の確信を有す。然れども之は今語るべき時にあらざるなり。

予は獨り一の思想家としてのみならず、又帝國臣民の一人として、予に取りては未來の理想的宗教會同の初一歩と思惟せらるゝ三教會同の成了に對して滿腔の歡喜を禁ずること能はざるなり。そはこが皇室の御爲國民の爲甚だ喜ぶべきことなりと信ずればなり。以下請ふ此問題に關して、なほ詳細に予の所見を述べしめよ。

理想的會同

予は佛基儒神の會同を信ず。予をして之を言はしむれば佛基儒神は天地開闢の其昔より既に存せしものなり。何となればそは各自其方面に於て宇宙の眞理を代表するものなればなり。

尙之を説明するに先ちて一言すべきことあり。そは神道に就きてなり。如何にも神道は吾人に取りては注目すべき宗教に相違なきも未だ世界に於て公に佛基儒と比肩し得る程の貫目あるものにあらず。世界の學者をして單に四教の名を聞しめば神道を其中に包容されたるものと想像せざるは勿論儒教をも除きて考ふる人々少からざるべし。蓋し多くの西人はマホメット教を以て儒教に替へん然れども儒教を捨てマホメット教を取るは決して識見ある仕方にあらず何となればマ

ホメット教は其道徳思想に於て儒教に及ぶこと能はざるのみならず、其特長たる一神教的思想に於ては既に基督教によりて代表せらればなり。儒教とマホメット教との問題は暫らく措きて神道を此等の中に加入するに就きてはそが日本固有の宗教なるが故にといふの外に何等か相當の理由なくては適はざるなり。予の希望を有の儘に述べしむれば、予は四教として佛教、基督教、儒教及び諸種の異教を云はんとす。所謂諸種の異教とは希臘古代の多神教の類を云ふなり。然り此故に古代希臘の多神教は其代表的なるものなり。然れども希臘の宗教は遠く昔既に其生命を失ひたり。之に反して神道は世界史上の新興國民の中に尚其權威を有す。且つ其名や頗る包容的にして諸種の異教を包容せしむるに足れり木村鷹太郎氏が曰ふ如く若し大和民族の祖先が希臘

羅典民族系に屬するものならば、希臘古教の代りに神道を代置するは今一層理由あることゝなるべし。又神道はよしや其教理現在頗る幼稚なるものなりとするも、尚充分之を理想化するの餘地あり吾人豈神道を觀ずして可ならんや。

以下予は愈々佛、基、儒、神の特色に就きて述べんと欲す。然れどこは全然予の識見を以て佛、基、儒、神を判釋するものにして、此より他に佛、基、儒、神の觀方なしといふにあらず。讀者幸に之を諒せよ

佛教の特色

佛教の特色は抽象なり。抽象の一語甚だ簡に過ぐるが如しと雖も是れ實に何人も看過すべからざる佛教の特色なり。諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜、是を佛教の三法印といふ。予は今此三法印を完全なる教理とし

て其中に甚深の意義を見出さんと欲するものにあらず。吾人の今爲さんと欲するは此三法印中に現れたる看過すべからざる特色を認識することなり三法印に現れたる特色は言ふまでもなく、その消極的、否定的なることなり、誰か無常と謂ひ、無我と謂ひ、寂靜と謂ふが如き表言を以て消極的、否定的ならずと曰ふか。人或は曰はん足下は無常や無我や涅槃の眞意義を解するや之に就きての大乘佛敎の所說を知れりやと。予は應へて曰はん。休めよ、大乘佛敎云々を說くを予は固く之を知れり。然れども佛敎家が此三法印を徹回せざる、限り予は何時までも此等の文字を通して其意義、否其思想の傾向を定むるなり。大乘と小乘とは予の關する所にあらざるなり。涅槃が絕滅にあらざることは必しもマックス、ミュラー氏を待ちて始めて知るべきことにあらず。而も釋迦は消

極的の言語を用ひて其極意を現はせり。これ予の佛敎の特色は消極、否定に在りと曰ふ所以なり、之を抽象といふは予自家の形而上學的の一聯の熟語中に於て特に消極、否定等と同意義のものを使用したるなり。蓋し消極否定は自ら主觀的傾向を有し主觀的傾向は自ら抽象的傾向を有すればなり。

西歐文明の感化を受くること多太なる現今の日本人が消極的といふことを輕しめ又は厭ふ傾向あるは自然なりと雖も、消極は必ずしも不可なるものにはあらず試に思へ抽象的といふことは消極的と同類の事なれども誰も亦そが精神的といふ意義を寓するは拒む能はざるべし。アリストートルが形式を以て實質以上のものとせしも亦此類なり。佛敎が抽象を以て其特色とするは佛敎の佛敎たる所以なり。決して

恥づべきことにはあらざるなり。西人は曰ふ、釋迦は無神論者なりと。如何にも釋迦は造物主を説かざりき。然れども主觀即ち佛とは見たるなり。注意すべきは此點なり。凡て物極れば形を失ふ。喩へば瞳子は能く物を見れども自身を見ず。釋迦が神を説かざるは釋迦自身が自己を佛即ち神となせばなり。蓋し神の上には神あることなければなり。消極主義も否定主義も之を惡しき意味に使用すればこそ惡しけれ、之を善き意味に使用すれば實に大なる眞理なり。佛教を批評する者深く之を思はざるべからず。

然れども消極にせよ。否定にせよ、抽象にせよ。主觀にせよ、精神にせよ。此のみを以て完全なる原理なりとは曰ひ難し。凡そ一利ある處一害の伴ふは物の通則なり、今此に掲げし原理の如きも亦畢竟此則を出す。例へば精神の如きも形體を離るれば幽靈の如くならんのみ。決して完全なる善き物とは謂ひ難はざるなり。此に於てか佛教の特色たる抽象を補ふものなかるべからず。此即ち吾人の次に述べんと欲する所のものなり。

基督教の特色

予の之より説かんと欲するものは基督教なり。基督教の特色は何ぞ。曰く。具體なり。此具體こそ實に基督教が佛教の特色を補ふ所以なり。何を以て予は基督教を具體教なりと判ずるといふに、基督教の神は客觀的なり而して客觀的の神には具體的思想が伴ひ來るは心理的必然の結果なればなり。按ずるに佛教と基督教との神觀の相違は其民族性より來れるが如し。印度人は沈思冥想的の民族なるが故に彼等は觀法の

中に佛を觀んとし。猶太人は血性的の民族なるが故に彼等は祈禱の中に神を觀んとはすなり。印度人の佛はより多く自然的にして猶太人の神はより多く人間的なり蓋し後者の如き艱難流離の歴史を有するものはエホバの如き人間的の神にあらざれば其衷心の滿足を贏ち得ざればなり。求むるものは與へらる此れ宇宙の原則なり。印度人は抽象を求めて抽象を與へられたり。猶太人は具體を求めて具體を與へられたり見よ、釋迦は波羅門教の改革者なれども遂に印度人其者たることは脱却することを能はざりき。耶蘇も亦猶太教の改革者なれども遂に猶太人其者たることを脱却し得ざりき。印度人の主觀的と猶太人の客觀的とは兩聖人の性格の上に歴々として之を徵することを得。耶蘇は其受洗の始より其十字架の終まで、天の父、てふ客觀的對象を信仰して終始

したり。釋迦は自已を天父の地位に置きて慈眼視衆生したり。是れ大に其教風を異にする所以なり。劔法を以て喩ふれば釋迦の劔は眞向に振りかざして大地も微塵に碎けよと打下す劔の如し。耶蘇の劔は下段に搆へて隙間もあらば九天の外に飛ばんとする勢ある劔なり。此兩雄の仕合は眞に世界の壯觀なり。予思ふに佛教は抽象的なるが故に從つて智に長じ基督教は具體的なるが故に從つて情に長ずと。智は靜的に情は動的なり。靜動は相補ひ相待つべきもの。決して一に偏すべからざるなり。父と母とは性を異にす。されど是れ相爭はんが爲にあらずして相和せんが爲なり。佛、基の二教亦又斯くの如し。若し佛教を父と觀、基督教を母と觀ば、子と觀るべき教は果して何ぞ。是れ予の次に言はんと欲する所なり。

儒教の特色

儒教は其性格に於て佛、基兩教の所生子の如き觀あり。蓋し儒教の特色は分析にあればなり。分析は抽象、具體の中に位する原理なり。試に佛、基、儒三教の本尊を比較して見よ佛教の本尊たる佛には非人格的の色彩あり。基督教の本尊たる神には人格的色彩あり。若し夫れ儒教の本尊たる天に至りては兩者の中間に位するものなり。世人或は儒教の天の觀念を非難して充分人格的ならずと云へども是れ儒教存在の意義を無視するものなり。抑も儒教存在の意義は折衷的態度に在りて存す。是れ一面非人格的なるが如く又一面人格的なるが如き天の文字が儒教に慣用せらるゝ所以なり。具體主義を本ずる猶太教や基督教の神が擬人的なるは必ずしも不可なし、否一面の眞理を藏すと雖も其弊や即ち

卑俗。會々儒教が折衷主義の神觀を有すればとて之を非難するに當らず。之を思へ、人は「否」といふべき場合には宜敷「否」といふべく「然り」といふべき場合には宜敷「然り」といふべく「否」と「然り」との孰れとも判じ得ざる場合には「或は」といふべきのみ。佛教は無神論なり。其態度は「否」の態度なり。基督教は有神論なり。其態度は「然り」の態度なり。儒教は懷疑論なり。其態度は「或は」の態度なり。之に比して次に述べんと欲する神道の如きは神秘論ともいふべきものなり。其態度は「否」とも「然り」ともつかざるは勿論「或は」にてもなく唯事の宜しきに從ふ中性的態度なり。按ずるに天道是乎非乎の嘆の如きは最も善く儒教の性格を發揮したるものと謂ふべし。嗚呼誰か懷疑を全然不可なりといふや懷疑は誠に道に進むの一過程なるを倘佛、基、儒、神のことを人間の氣質に喩へていはゞ佛教は粘

液質の如く、基督教は膽汁質の如く、儒教は神經質の如く、神道は多血質の如し。而して其能く粘液質なるものは宗教原理たるに適し、其能く膽汁質なるものは哲學原理たるに適し其能く神經質なるものは倫理原理たるに適し、其能く多血質なるものは科學原理たるに適するなり。然り而して儒教の使命は其倫理的なる所に存するなり。

神道の特色

神道の特色の綜合的なることは既に述べたるが如し、又そが科學的なることも、神秘的なることも、多血質的なることも亦又然り。或は曰はん。神道は八百萬の神を說くものなり。足下は此思想をも許容せんと欲するかと。予は應へて「然り、大に然り」と曰はんと欲す。抑も八百萬の神とは無數の神の修辭的表言法に他ならず。無數神の思想は果して近代人

の思惟する如く爾く無意味なるものなるか。斷じて然らざるなり。聖書に耶蘇が汝等は神々なりと錄されしにあらずやとの一句を援用して猶太人に應へたる所あり。確に舊約時代の猶太人は汝等は神々なりとの語に適當なる意味を見出して之を是認したりしなり。是れ寧ろ當然の事のみ。無數の神とは畢竟萬物今少し學理的にいへばライブニッツが主張したる如きモナッドの類ならんのみ。予は今支那思想を借りて其然る所以を說明せん。天、地、人、萬物といふ一聯の語は支那人の暫々用ゆる所の熟字なるが、こは實に注目に値ひする言葉にてあるなり。人或は曰はん。天、地、人三才の說の如きは天圓地方時代の迷夢全然觀るに足らずと、夫れ然り豈其れ然らんや。如何にも古支那人の天地の觀念は大に其實際と合せざりき。何となれば地球は圓球なりとの知識一度天下

に弘まるや天は高き所なり、上の方なりなどいふ思想は其意義を失はざるを得ざるに至りぬ。何となれば甲が上として指す所は甲の反對の側に生息する乙の足の方に當ればなり。かの聖書中に在る。耶蘇が山の上より天に上れりなどいふも皆此迷妄時代の遺物のみ。然れども古人は天といふ語を獨り文字通りの意義若くは物質的の意義のみに使用したるにあらず。又之を轉義的の意義にも使用したるなり。苟も今日常識ある者は天下に精神原理の存在せることを拒む者はあらざるべし。古の支那人は天の漠々たるを見て早くも之を精神原理のシンボールとして受取れり。されば リテラル、センスの天の觀念はよしや破壞せられたりとするも、フイギユレーティーブ、センスの天はとこしへに長きなり。地に於ても亦然り、地球は決して天に對する

程の偉大なるものにあらずして、太陽系統の一遊星に過ぎず。是れ一見古支那人の考を根本的に破壞するものゝ如きも實は然らず。古人は地に於てもそのフイギユアーを捉み得たりしなり。彼等は地を以て物質原理の代表となせり。されば苟も常識ある者にして天下に此原理の存在せることを認めざる者あるべき。されば リテラル、センスに於ける地の觀念はよしや破壞せられたりとするも、フイギユレーティーブ、センスの地は天と共にとこしへに久しきなり。人に關しても同樣のことあるなり。然れども人に關しての迷信は未だ全く取除かれ居らざるが如し。此啓蒙や實に不肖仙醉の生を此世に受けて聊か社會の爲に貢献せんと欲する所のものゝ一つなり天に就きての迷信は天文學によりて拂はれ、地に就きての迷信又地文學によりて拂はれぬ。若し夫れ人に就

きての迷信は萬物一體の原理を了解せざれば之を拂ふこと能はざるなり。天地の迷信既に解けて人に就きての迷信未だ解けざるは何ぞや豈是れ諺に謂ふ所の燈臺下暗きものにあらずや。吾人は斷じて此迷信より人類を解放せざるべからず。何となれば人文學の一切は今尚は實に此迷信の爲に誤られ居ればなり。一例を擧ぐれば宗教家が或特殊の個人例へば耶蘇の如き人を神子なりといふことなり。所謂進歩派基督教徒なる者は往々神子の名を耶蘇のみに限らずして之を自分等信者にも適用す。而して其事を非常に進歩的なりと思惟するものゝ如し。されどこは思はざるの甚しきのみ。如何となればこは五十歩百歩の論爭に過ぎざればなり。天を父とし地を母とし人を子とすといふことは蓋し支那思想中の最も趣味津々たるものゝ一なるべし然れども此に所

謂人は前に天地に就きて曰ひしと全然轉義的意義の人ならざるべからざるなり。かの自然人を以て神子に擬するが如きは宗教をも哲學をも倫理をも知らざる烏滸の仕業にして、天圓地方の迷信と果して何の擇む所ぞ。予は尚此事を明かにする爲に天下の人々に一の奇問を發せんと欲す。「足下の頭髮は足下の身體に附屬するや」と。皆應へて曰ん。「然り、さなり」と。予は再び問はん。「然らば足下の周圍を廻らす空氣は如何」と。皆應へて曰はん。「否、何となれば空氣は我が外に在ればなり」と。されど思へ、空氣は口より肺に入り、肺より心臟に入り、心臟より動脈に入りて全身を循環し之を營養す。我が物といふ頭髮は之を削り去るも敢て生命に拘りなし。然れども我が物にあらずといふ空氣は一時たりとも存在せざれば三寸即ち息絶ゆ頭髮が皮の中に喰ひ込めると空氣が身體の中

に浸入せると何の相違がある。よしや一歩を讓りて空氣は何以て我が身體と分ち得とせんも、空氣よりも更に微妙なる熱は如何。光は如何。電氣は如何。エーテルは如何。彼等は縱横無盡に我等の體内を通ひつゝあり。此等のものは今此處にありといひ終らざるに既に天外萬里に馳する底のものなり」我が身體は頭の先より足の先までなり」との定義はた身體とは四肢五體の謂なり」との定義は畢竟肉眼の上に言語の標準を置ける人間社會の習慣やアンダースタンディングに過ぎずして學理の眼光より之を見れば眞に愚の極みなり。昔はソクラテス「ノー、ザイセルフ」と曰ひて、世を覺醒したり。予は今世人に先づ已が身體の範圍は如何にと見よ」と曰はんと欲す。蓋し肉體のある所には精神も亦あるべければなり。萬物一體の語古來より之あり。然れども其說の多くは餘りに

空理に走り過ぎたるが如し。予に在りては萬物一體は空論や理想にあらずして炳乎たる宇宙間の大事實なり。かの大我とは畢竟萬物一體の我の謂のみ。此の我や佛や神や天と同一物なり、何の相違もあるべきものにあらず。人其れ此に至りて其思想が所謂自然人の觀念中に囚るゝことの如何に愚なるかを知らん支那に於ける天、地、人三才中の人なるものは予の今謂ふ所の大我程の大なるものにはあらず。人は天地の兩性を受けて生ると曰へば蓋し彼等は精神と物質との仲間に位する一原理、プラトー學派にいふ所の靈魂にもあらず肉體にもあらざる生命の如き原理を指すものならん。されば天、地、人三才に於ける人は苟も精神と物質とのコーオーペレートする所には到る處に存すと謂ひて可なり。斯くの如く人てふ語にても識見の如何によりて其内容性質の如

何樣にも變化するものなりと知らば、かの基督教徒の紋切形たる神は父にして、人は子なりといふが如き言葉は眞の方便的の言語として之を聞かざるべからざるなり。人は觀方如何によりて天の父にてもあり得べし、母にてもあり得べし、子にてもあり得べし。其他何にてもあり得べし唯かの一個の自然人を捉へて、やれ神子なり、やれ神なりといふは是れ許す可らざることに屬すかの三位一體論の如き又此邊の解決よりつけ來らざれば到底解決し得べき問題にあらざるなり。之を要するに天、地、人三才の說は決して嘲り去るべき說にあらずして深く味ふべき說なり。萬物の觀念又々然り。世人は萬物といへば日、月、山、川、草、木、禽、獸、蟲、魚乃至を思ふ、さなり世人は萬物とは種々の形を備へたる事物なりと考ふ。此れ人間の習慣上無理ならぬことなれども其實斯くの如きは

單に人間の思はくに過ぎず。恰も人間が人間の身を制限したるが如く日は日、月は月、星は星、山は山、川は川、草は草、木は木、禽は禽、獸は獸、蟲は蟲、魚は魚、と區別して考へ、區別されて彼等が造られおるかの如くに考ふると雖も、これ人間の空想のみ。萬物は單に萬物として存在せるのみ。然り天、地、人三才の原理の歸着点たる萬物てふ一原理として存在せるのみ。人爲の區分其者は天然には之なきなり。耶蘇は人を己の如くに愛せよといふ。天下以て金言となす。然れども之は未だ舊思想を脫却せざる格言なるのみ。我は曰はん。「萬物は一體なり、故に之を愛せよ」と。予は固り耶蘇に比すべき愛も德も無き者なり。然れども人は人物論と學理とを混仝すべからず。理想と學理とに訴へ來らば、予の理想と學理とは必しも耶蘇の下にありとは斷ずべからず。こは予の誇の爲に之を曰ふにあ

らず、二十世紀の光榮の爲に、否道の莊嚴の爲に之を曰ふなり。神道、神なからの道は八百萬の神といふものを一々區別されたる神々と見ればこそ低き神觀とは見ゆれ。八百萬の神とは神の無數的方面への顯現即ち眞意義に於ける萬物なりと見ば、所謂悠悠即寂光土、山川草木悉有佛性の大乘說と見らるゝものにして決して佛と基と儒とに及ばざるものにはあらざるなり。由來宗敎家は我田引水を事として他敎を好意を以て見ることを知らず。是れ其隱れたる美に與ること能はざる所以なり特に神道の如き未だ精細なる研究を經ざる敎に就きては最も然りとなす。

結論

論じ去り論じ來りて、三敎會同問題に關して畧ぼ予の所見を盡したりと信ず。讀者諸君の見らるゝ如く予の佛、基、儒、神に對するや極めて公平なり。予は單に此等諸敎本來の面目を發揮せんと欲したるのみ。然り而して此等諸敎は如何にも能く眞理の各方面を代表せり今若し之を季節を以て喩ふれば、佛敎は冬の如く、基督敎は夏の如く、儒敎は秋の如く神道は春の如し。孰れも皆其れ〳〵珍重すべし。就中予は春を好む。蓋し春は一年中の最も和平なる季節なればなり。

冬の夜も夏の眞晝も秋の夕も
春の朝の待たれこそすれ

抑も予の此等の議論たるや予が獨得の形而上學より流れるものなるが今其形而上學を具さに此に陳べんことは事情之を許さず。今は唯其形而上學なるものは

數

零一二三

といふ數字を術語に使用せるものにして、予の所謂佛教若くは抽象主義とは畢竟零のこと基督教若くは具體主義とは畢竟一のこと、儒教若くは分析主義とは畢竟二のこと、神道若くは綜合主義とは畢竟三のことなり宗教、哲學、倫理、科學といひしも又其れ〳〵此數に關はるなりといふを以て己め、此が詳論は他日に讓らん。尤も此に尙一言し置きたきは元來予の零一二三の思想は三位一體論の思想より來りしものにして三位一體論は實に予の以て諸教々理の契合點なりと思惟する所のものなり。固り予の三位一體論なるものはかの基督教の傳說的の三位一體論とは何等の關係なきものにして純乎たる形而上學的の三位一體論なり。所謂予の三位とは零一二にして一體とは三なり。然り而して

三位は方法論ともいふべきものにして、一體は目的論ともいふべきものなり。さはいへ方法をつくしてこそ目的は達せられ、と說くものなれば、穴勝に目的論といふことのみ言ひて、方法論を觀ざるにはあらず先づ方法を說きて遂に目的に及ばんとす。此れ予の採る所なり。讀者幸に之を諒とせよ。

嗚呼かの三教會同なるものは獨り日本思想界の大事、又政治上の大事なるのみならず。是れ實に世界精神界の大事なり。されば當局者は固り學者、不學者を問はず民衆一般に誠心誠意を以て此議を迎へ宜しく燦爛たる好果を齎すべきのみ。予は最後に大聲疾呼して曰はん。耳ありて聽ゆるものは聽け。此は實に吾人を世界開闢以來の最大盛事に導くものなるぞと。

明治四十五年五月三十日印刷
明治四十五年六月一日發行
明治四十五年六月十五日再版

定價金十錢

在米國フロリン府
著者　齋木仙酔
名古屋市中區小林町三十三番地
發行者　藤原直信
名古屋市東區宮町四丁目十二番地
印刷者　横山圓太郎
名古屋市東區宮町四丁目十二番地
印刷所　進文舍
名古屋市中區小林町三十三番地
發行所　道の栞社

不許複製

269
454

名古屋道會の主張及び綱領

本會は一教一派に關する者にあらず、又教祖中心教にあらず、萬世に亘りて易らざる天地の公道、宗教の根本義に據り、左の綱領を基として、一身の安心立命と、天に對し、人に對し、永遠に對して、人たるの本分を完うせしめん事を期するものなり、

一天地の大恩を信ずる事
一己の德を修る事
一人の爲に盡す事
一永生を信ずる事

名古屋市中區小林町三十三番地　名古屋道會

會員　右の綱領を信奉し之を行爲に施さん事を期する者は何人たりとも本會員たるを得るものとす

雜誌　名古屋道會にては機關雜誌として毎月一日「道の栞」を發行す